

ひかりのこ

12月園便り

聖ミカエル幼稚園

2016年11月18日

月主題：喜んで

幼稚園に歩行に障害があり、上半身を使って園内を移動する、るかちゃんという女の子がいます。とても笑顔のかわいらしい女の子で、朝、玄関で私を見つけると、「園長センセおはよう。こっちおいで！」と声を掛けてくれます。るかちゃんは2階の保育室に行くのも階段を這って上がっていきます。しかし、最近成長と共に体が重くなってきたのか、階段を上るのをおっくうがるようになってきました。私も階段の途中の踊り場に隠れて、「るか、おいで。」と、時々顔を出して、るかちゃんの気を引いて、なんとか階段を上がってもらおうとするのですが、最近はこの私の声掛けにも飽きてきたらしく、なかなかこちらを見てくれません。そこで担任の先生は、クラスの子どもたちに、るかちゃんに声を掛けるよう、お願いをしました。「お友達作戦」です。

ある日も、階段2段目ぐらいで、座り込んでいるるかちゃんの周りに、数人のお友達がやってきました。

「るか、おいで。」「るか、頑張れ。」「早くお部屋に行って一緒に遊ぼうよ。」子ども達は、2、3段上から声を掛けて、るかちゃんの気を引くように工夫しています。

さっきまで、私が声を掛けても、ちっとも動かなかったるかちゃんは、ニコニコして、ずんずん階段を上って行きます。やっぱり大人は子どもにはかないません。るかちゃんが幼稚園で一番大好きなのは、クラスの子どもたちなのだ、ということがはっきりわかります。

上までたどり着いたるかちゃんは、車いすに乗ります。車いすを押すのも、お友達です。

るかちゃんを含めて、子ども達みんなが、この生活を当たり前のこととして過ごしている事が、本当にいいなあ、としみじみ思います。

いろいろなお友達とかかわることで、子どもは成長します。お互いがお互いの先生です。たくさん遊んで、たくさん相手のことを思いやって、大きくなってほしいものです。

(るかちゃんのお母さんに、お名前を出す許可をいただきました。)

園長 渡部良子

キリスト教保育

「アーミッシュの人々」

いま我が家では、妻が長年使ったガラケーから、スマホに替えるかどうかという問題が勃発しています。本人はガラケーがいいと言うのですが、周りからLINEで連絡が取れないとか、Facebookが使えないと困るという優しい圧力が加わるためです。

そこで思い出すのは、以前訪れたことのあるカナダ東部のアーミッシュといわれる人々のことです。彼らの多くはキリスト教の再洗礼派と言われるグループで、16世紀頃から迫害を逃れてヨーロッパから北アメリカにやってきた人々の子孫です。ハリソン・フォード主演の『刑事ジョン・ブッカー 目撃者』という映画で有名になりました(アカデミー賞受賞作、ぜひご覧下さい)。中でも厳格な人々は、500年前の祖先の生活を、この21世紀の社会で頑なに守ろうとします。服装は当時の黒一色、電気は一切使わず、交通手段は徒歩か馬車。祈りと労働の日々です。周りがどんなに便利で格好良く見えても、見事なまでに自分たちの生活スタイルを貫き、そのことに自信と誇りを持っているのです。私が知る限り、カナダ政府も他の住民も、彼らの独自性を尊重し、特別な交通ルールを設けたり、彼ら独自の学校の設立も容認しています。多様な人々がいるのが当たり前で、見た目の「違い」によって特別視されたり、まして、いじめられるという話を聞くことはありませんでした。

「ありがと～、さよなら～、ケイタイ」というCMがばんばん流される世の中であって、ふと気がつくとき日本社会はますます「横並び」の意識が強くなったように感じます。それと共に、「これが私の生活です」と言えるようなオリジナルな生き方、生活スタイルに自信と誇りを持つことも少なくなっているのではないのでしょうか。自分が人とは違う自分であることを、もっと喜べるようになりたいと思うのです。

チャプレン 下澤 昌